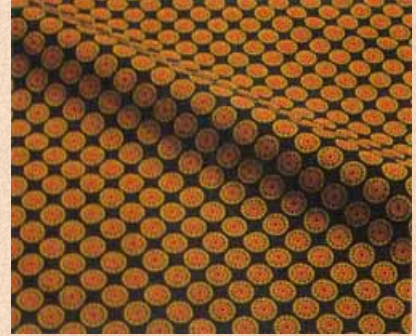


職種	名前	テーマ
NHK大阪チーフアナウンサー	松川 洋 右	ネクタイと私

No.29



放送が終ってスタジオを出たトタン「松川さん電話です。視聴者からのようです」と呼び止められた。番組の内容や言葉遣いについての問い合わせや苦情の電話をいただくことはよくあるので別に驚きはしなかったが、案の定その電話も「松川さん、今の番組で締めていたネクタイは茶色でしたか、黒でしたか……」と中年の御婦人の声、「ハイッ、濃い目の茶ですが…」と答えると「やっぱり茶ですって！ 私の勝ちよ！」でガチャン。

スタジオの照明やカメラの調整、茶の間のテレビの色調次第で紺色が黒に見えたり、臙脂色が赤に映ったりするケースはよくあることで、どうやちアナウンサーのネクタイの色もカケの対象になるらしい。

ある調査によると、テレビを見ている人の関心の八割は「どんな人が、どんな服装をして、どんなしゃべり方をするか……」などで「ナニを言っていたか……」など内容についての関心はわずか二〇%にすぎないと聞いて番組の中味で勝負！！

と考えている私は大きなショックを受けた。

印象論が優先するテレビであれば、これも又己むを得ないが、カメラの前に立つアナウンサーがネクタイや背広に細やかな気配りをするのは、おしゃれというより、視聴者に対するエチケットと考えて番組の内容、性格などに応じたネクタイの選択にいつも腐心している。

S.58.4.

職種	名前	テーマ
慶応義塾大 学教授	鍵谷 幸信	ネクタイは男性ファッションの花道だ

No.30



男のおしゃれのキイ・ポイントはネクタイだろう。スーツやシャツとも関係する。女性と比べてアクセサリーは皆無に近いのだから、ネクタイに焦点がかかりめだつのである。どんなにいいスーツを着ていても、ネクタイが野暮ったいと、折角のスーツも台無しになる。女性もそっぽを向く。うまくいく恋愛もダメになる。スーツに合わせてネクタイをしめるが、ネクタイのレゾン・デエトル(存在感)を重んずるなら、気に入ったネクタイに似合った、今のことばでいえばよくコーディネートしたスーツやシャツを作ることだってある。ネクタイはいわば男性のファッションの花道で見得をきるところでもあり、サイレントだが、さり気ないおしゃれを発揮するものだろう。

ネクタイにも時代の流行感覚は反映し、幅が太くなったり細くなったりする。ネクタイも実に忙しいのである。ぼくはネクタイは自分で買う。人にもらったもので気に入ったものは少ない。黒豹が獲ものを狙うように素早く眺めて、いいなと思ったら迷わずに買う。迷いは禁物。気に入らなかつたらすぐ退散した方がいい。きめるのに五秒あればいい。

だから店員が「よくお似合いですよ」なんていっても耳をかさない。あれは人の趣味を無視した暴力行為だ。女性がボーイフレンドや恋人にネクタイを贈るため、店員と相談している光景をよく目にするが、ほんとうの友情や愛情があるなら、そんなことはしないで、相手の好みをわきまえておき、さっさと買ってプレゼントする位の感性のアンテナをもっていないでは。

いつだったか丸善でイギリスの絹のネクタイが気に入って買った。大いにご機嫌になって帰宅。ネクタイをしめてガスストーブに火をつけたとたん、折角買ったばかりのネクタイをこがしてしまった。その夜は悲しくて眠れなかった。翌朝丸善に駆けつけ、開店と同時に洋品部へ行き同じものを買ったことがある。

ぼくは国産・外国製にあまり気を使わない。オースティン・リードとかバリーとかサンローランとかブランドものでなくてはなどと思わない。気に入ったネクタイをして、同じものをした人が電車で前に坐ったりすると複雑な心理になる。緊祥一番、いいネクタイをしている男性は、同性がみてもいいものである。

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
三和銀行副頭取	神田 延 祐	「男の履歴書」

No.31



われわれ、日々スーツを着用している者にとって、ゾーンというのは特別の意味を持っている。というのも、それが背広姿において最も目につく場所であるとともに、われわれが自己主張できる唯一と言ってもいいスペースだからである。ビジネスマンにとって相手に与える印象はきわめて重要であるが、時にネクタイは百のことばより雄弁にその人を語り、好ましい印象を与えることがある。私自身の経験に照らしても、出会いの場とともに、その人のネクタイがいつまでも心に残っている例がいくつかある。

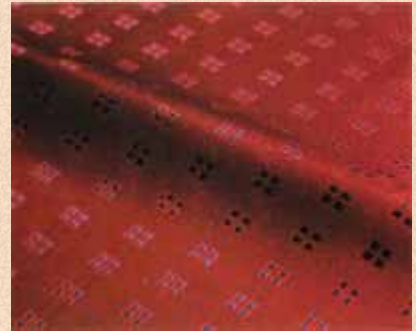
今にして思うと、それは、単にネクタイの色や柄が服にマッチしていたためではなく、その人のかもし出す雰囲気にとけ込んでいたからではないかと思う。大げさな言い方になるが、本当のおしゃれとは形や色の組み合わせではなく、その人がそれまで刻んできた年輪や生きざまをさりげなく投影したものだと言えるのではなからうか。故大宅壮一氏には「男の顔は履歴書である」という名言があり、またリンカーンには「男は四十歳を過ぎれば自分の顔に責任を持たねばならない」ということばがあるが、「顔」を「ネクタイ」に置きかえてもびったりくる。

かく言う私も背広を着始めてかれこれ三十年。男の履歴書にふさわしいネクタイのスタイルをようやくつかめたかなと思うこの頃である。もっともこれは自己満足に過ぎないようだが。

s.58.7.

職種	名前	テーマ
劇作家	香村 菊雄	老醜とネクタイ

No.32



私は今七十歳代の半ばである。

市からくれるバスの優待パスには高と大きく表示してある。

高校生の高ではない、高齢者の高である。年金ももらっているが老齢年金と表示してある。診察券にも高とデカ判が押してある。自分自身では現役のつもりだから、高齢だの老齢だのということをつい忘れていて、寝てる子を起すように、「お前さんは高齢だぞ、老齢だぞ、福祉の恩恵を蒙っているのだぞ」と呼び醸されているような気になる。

しかし、自分ではそんな痩せ我慢を張っていても、自然の摂理には勝てない。というのは家から駅までの七百メートルの道が、二十年前には十分間で歩けた。それが今では十二分かかるのだ。自分では以前と変らぬペースで歩いているつもりなのだが、やっぱり少しずつ老化しているのかなあと無然とする。

若いとき、つまり五十数年前のモボ時代、ソシアルダンスを習った。厳しい教師で、「ステップを踏むときは、脚で歩こうとしてはいけない、脚で歩こうとするから尻が出て、屁っぴり腰になるのだ、オジン臭い歩き方になるのだ」とよく尻を平手で叩かれた。背筋を伸ばして胸を琴り、上体で進行しようとすば、脚は自然に前に出る。その脚をカカトから床につけて歩きつづけるとシャンとした姿勢になり、若くシャープな感じになると教えられた。習い性となって、背は低いが姿は若々しいと今もよく冷やかされる。

だから電車に乗っても、席をゆずられたことがなかった。ところがある日突然、異変が起った。シ～バーシートでもないのに席をゆずられたのである。四十代の中年からである。

ありがたく座らせてもらったが、ふと気がついた。その日は私はノーネクタイだった。ネクタイをしないと気がラフになってゆるむものである。それに加えてあごの下から首筋の醜いシワがむき出しになって年齢が露出するのだ。

シワかくしと云ってはネクタイに申しわけないが、格調ある ゾーンはやさしく老醜をいたわってくれるのである。

s.58.4.

職種	名前	テーマ
医博・鶴見大学名誉教授	山崎 清	ネクタイは男のシンボル

No.33



ネクタイは男性自身、男のシンボルだ、という、ああ、あれのことか、とお考えになる。それは勘違いではありません。なまじりネクタイの男は、あれも萎えているだろうし、ぼつちりとしたネクタイをしていれば、あそこも勢いがよいと想像します。ネクタイは男性自身の象徴です。

ネクタイはその人の「人間」の中身を端的にあらわします。

老人と若者、地位の高い人と低い人、金持と貧乏人、人を使う人と使われる人、知能人と金銭人、上品と下品、優雅とお下劣、出世する人と出世しない人、美男と醜男、派手な人と地味な人……など、ネクタイはその人の人格のすべてを露呈しています。

顔(人相)をみるよりネクタイを見よ。

*

ネクタイは色と柄(模様)で出来ています。柄は点・線・面の構成です。

色に反応する人と柄に反応する人という区別があります。そこにはネクタイ心理学があるでしょう。それはネクタイ人相学でもあります。

ハデな明色好みの外向性、ジミな暗色好みの内向性性格という個人差、あるいは大柄好みと小柄好みの人種(民族)差ということもあります。ネクタイはそのまま民族誌のテーマです。

私は、偶然の機会で、バンコックの小さなお店でネクタイを二本買ったことがあります。色も柄もエキゾチックで、たいそう気に入り、しばらくはそのネクタイをしていました。しかし、絹の布地が薄っぺらで、いかにも貧弱でした。間もなく私はそれを捨ててしまいました。絹という材品が旧弊なのです。

*

テレビに出てくる政財界人たちのネクタイを見るのはおもしろいながめ(観察)です。その高価なものであることもおどろきですが、保守か革新かもわかります。

一次性性格のおしゃべり上手(軽薄)か、二次性性格の口下手(重厚)かの区別もネクタイをみればわかる、と言ったらおおげさでしょうが、政治家たちが、あんがいネクタイに気がつかっていることはよくわかります。

ネクタイは人前(テレビ)に出るときの男の礼儀だからです。

*

今春、パリモードのセリーヌ夫人が来日しました。私は偶然のゆきがかかりで、夫人のお部屋(ニューオータニの二十二階)にお訪ねしたのですが、たくさんのセリーヌ・ネクタイをみせていただいて、どうぞーといわれ、一本だけ頂戴しました。

私はそのときディオールのネクタイをしていたのですが、それと同じ色のものを選んでしまいました。それは、膿脂色(黒味をおびた赤)でした。老年(八十一歳)になると、好みの色が固定化してしまうことがあるようです。

私は、いつもは濃紺の厚ぼったいネクタイをしています。柄や縞模様のあるものは嫌いです。そこに、私の内面の性格構造がはっきりと出ています。

*

夏になると、パリ在住の二人の孫娘(二十歳と十六歳)が、はじめて母の国日本へバカンスに来ることになりました。そこで、東京のおじいちゃんにネクタイのお土産を持って来るなら「ドミニック」の手縫いのものがよいぞ、とあらかじめ指定しておきました。

ホテルのロビーで受けとってみると、それは泥色で、絵柄は何もありません。派手なようで地味なようで布地は厚ぼったく、

いかにも締めくずれのしないような、がっちりしたものです。

私は気に入りました。

ドミニックのご主人は、このごろ日本からの注文が多くなりました、とよろこんでいたそうです。おじいちゃん(私)のパリ通にもおどろいた、と孫はいうのでした。

*

ついでに記しておきましょう。

女の人が、男に、よくネクタイを贈ることがありますが、これは危険です。

ネクタイの色と柄の選び方で、その女性の人柄、性格、教養、美意識など、スケスケにわかってしまうからです。

せっかくの好意のネクタイで、女は男の気もちをそこね、やがて振られてしまいます。むろんその反対の場合もあり、よくぞおれの好みを知っていてくれた、ということもあるでしょう。

しかし、それはひどく難かしいことです。

夫のネクタイを選べない妻はダメ。

男は、あんがいネクタイへの好みが厳格です。気をつけた方がよらしい。

*

セビロとネクタイが現代の衣冠束帯とするなら、男は須らく堂々としたネクタイをすべし。

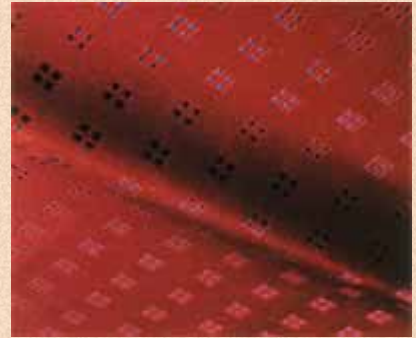
*

男が、いつか、ネクタイ文化から脱却するであろうころには、女のネクタイ文化がはじまるのではないかと私は気にしています。その気配がみえています。

s.57.11.

職種	名前	テーマ
歌手	笈田敏夫	ネクタイと私

No.34



私が慶応の幼稚舎に入学したのが、昭和七年のこと。ひと昔前だ。当時の慶応の大学生は、紺のネクタイに、黒のソフトをかぶり、他の大学生よりは、スマートに見えた。私達は、三田の山から降りてくるこのスタイルを羨望と憧れのまなざしで見たものだ。要するにネクタイというものが、大人の証だったのだ。早くネクタイを締められる歳になりたい、私達は一樣に願ったものだが、戦争に突入すると同時に、国民服なるものが日本の男の制服になり、一時ネクタイというものが消えてしまった時期が生じた。その反動が戦後すぐに表われた。

進駐軍が持ち込んだ大柄な派手な幅広のタイが、我々の首を飾ったのだが、小柄な日本人には、不釣り合いのものだった様に思える。その上、我々ジャズ仲間の間では、ウインザーノットという結び方が流行したので、なおさら、妙なことになった。しかし、その頃の癖は未だに直らず、今でも私はウインザーノットで通している。

昭和三十年過ぎから、街にネクタイを置く店が現われ、自分でネクタイを選べる様になった。振り返ってみると、いろんなネクタイを買ったものだ。試行錯誤の繰り返しの挙句、現在私のネクタイ掛けに定着しているのは、レジメンタル・ストライプと無地のものということになった。大体、ストライプはアイビー・ルックから端を発しているものなので、この年ではと気がひけるが、好きなものは仕様がなない。外国に出掛けると、その街で必ず一本ネクタイを求める。その時、その場所が、あとになって、鮮明に一本のネクタイを通して思い出されるからだ。

人からネクタイを贈られることも多いが、なかなか好みに合ったものに出逢うことがない。しかし、贈り主に出逢う時は、それを締めるのが礼儀と思うので、このネクタイは誰々からと忘れぬ様に細心の注意を払っている。こういう点が、人気稼業のシンディとところだ。

S. 58.7.

職種	名前	テーマ
スポーツライター	新宮 正春	"ミスターの選球眼"

No.35



ネクタイは、選ぶのがむずかしい。「これだ！」と思って買って帰っても、いざ締めてみるとどうもしっくりこなくて、そのままタンスの中に寝かせてしまうという経験は、だれでも持っているだろう。

私はあるスポーツ紙で巨人担当記者をしていたが、あるとき"ミスター・ジャイアンツ"の長島茂雄とネクタイを買いに行き、その選球眼(?)のよさに驚いた覚えがある。

東京・新宿のデパートへ二人でぶらりと入ってみたのだが、"ミスター"はショーウィンドーの上に飾られていたネクタイを一目見るなり、「これ絶対いいですよ」と、私にすすめた。

シルク地の黒に、無数のエンブレムが散っているプレザー用のタイだ。

その当時でもあまり見かけない柄で、聞けば婦人用ということだった。寸足らずで、そのまま締めるわけにはいかないが、それくらいで引きさがる"ミスター"ではない。

「同じ生地で、男物を仕立てることができるでしょ?」と、強引に頼みこみ、とうとう特注のタイを手に入れた。

打つ、と決めたらボールになる高目のタマでもホームランにしまった "ミスター"らしい選び方だが、でもそれはいつも中途半端な買い方をしていた私のような無粋な男を、いくらかでもダンディーに見せてくれるネクタイになったのはたしかだ。

s.58.1.

TIE エッセイ

職種	名前	テーマ
西武百貨店会長	堤 清二	ネクタイ考

No.36



昔はなにか実用的な、あるいは精神的な意味を持っていたのだが、生活の様式が変わってしまったので単なる装飾に変化した、と考えられるものが世の中にはいくつかある。

ある種の仏教とか、仏教でなくても日本における宗教の多くはそうした分類に入るのではないかという気がする。つまりそれらは冠婚葬祭の手順なのである。

それならばそういった宗教は価値が低いのかと言えば決してそうではない。金銭的価値は高く、冠婚葬祭について何か書けば必ずベストセラーになるのを見ても、その有用性は歴然としている。

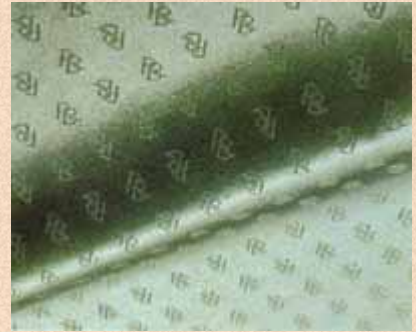
そうした事物のなかであって、ネクタイははっきり自らを装身具と規定していることによって、形骸化した宗教よりははるかに名と体を一致させた美しい存在である。何故ならネクタイは勿体ぶって～永遠の魂の救済について～などというようなお説教はぶたないのだから。

ただつつましく黙って、襟元を飾るのである。ネクタイを締めていること自体が正直で実直な人間の象徴になったいきさつは多分こうした事情に由来するのではないだろうか。もっともそれを逆手に使っている人間も結構いるようだけれども。

S.53.1.

職種	名前	テーマ
麒麟麦酒相談役	佐藤 保三郎	ネクタイとわたし

No.37



私の一日は、朝の入浴とビール小びん一本を飲むことから始まる。商売柄言うのではないが、烏の峠かぬ日はあっても、ビールを飲まない日はまずない。この習慣はもう十五年ほど続いている。それだけ私が健康だということであろう。ビールには、ホップに含まれている鎮静剤とか血圧正常化に役立つもの成分が入っている。そのことを身をもって証明していると思っている。とは言え、齢古稀を過ぎてはゴルフの連チャンにはいささ

些かくたびれるようになった。ただ、少々疲れても、上着を着てネクタイを結ぶと自らシャンとなり、腰の痛みも、けだるさも感じなくなるから不思議だ。喜ばしいことなのか、あるいは五十年にわたるサラリーマン生活の習慣による悲しい性なのか.....。

私は草葬の出で、たたきあげ社員の果てと自称しているくらいだから、元来、服装には気を遣わない方であった。が、最近だいぶ変わってきた。家内や娘が私の無頓着ぶりを見かねて、うるさくなってきたからである。

テレビの政治討論会などで見る国会の先生方のネクタイ。ずいぶん派手な方もいらっしゃる。これに刺激されたことも否めない。国事を論ずるほどの人には、やはり若さが必要だ。よぼよぼの老人では頼りにならないから、ネクタイも鮮やかに、なにかポイントが決っていてほしい - こう考えていくうちに、わが身に思いがまわってくるわけである。それで、このごろはネクタイも家内や娘の選んでくれたものに、よろしくお世話になっている。会長になっても、よぼよぼの風情は見せたくない、という次第である。

s.54.9.

職種	名前	テーマ
衆議院議員	園田 直	ネクタイは男のシンボル

No.38



私は二十代を戦場で送った。青春は炎と泥に埋もれたわけだから、服装にかまう神経がなくなっていた。モノが無かったこともあるにせよ、昭和二十二年に代議士として初登院した時は飛行服姿だった。

代議士になってみると、これは一種の接客業みたいな側面もあって、とにかく相手に不快の念を与えないようにという気遣いをするようになった。ネクタイについても同様であるが、これはこれで自分も楽しむところがある。好きな柄、好きな色彩を身につけているだけで多少なりとも心がなごむなら、こんな安い精神安定剤はない。それが高じてスーツの裏地も派手な柄モノにしている。

米国のモンデール副大統領がいらした時、赤い裏地を見せて「どうだ、若いだろう」というから私も「ほれ、この通り」と広げてやったら、両手をあげて「参った」ということだった。そうやって両者はうちとけて会談に入っていた。だからネクタイは……結論は言わずもがなである。

s.57.11.